

ぼくはエッチに なりました

梅田俊作・佳子



草土文化

◇著者紹介◇

梅田俊作（うめだ しゅんさく）

梅田佳子（うめだ よしこ）

1942年京都府生まれ(俊作)。1947年福島県生まれ(佳子)。夫婦共作の作品に「いもうとのばんつはいちごもよう」(旺文社)、「あたしたちきょうだいうれしいな!」シリーズ(新日本出版社)、絵本に「ばあちゃんのなつやすみ」「がまんだがまんだうんちっち」「よーいどんけついつとうしょう」(岩崎書店)、「ゆきみち」(ほるぷ出版)など、多数ある。

現住所 東京都世田谷区赤堤 3-20-7

ぼくはエッチになりました

1988年2月10日 初版第1刷発行

作・画 梅田俊作・佳子

発行者 田 辺 徹

発行所 草土文化(そうどぶんか)

〒102 東京都千代田区五番町10-6

TEL 03(264)0631 振替・東京5-46122

印刷所 光陽印刷 製本所 昇栄社

ISBN4-7945-0311-3 C8093

ぼくはエッチに なりました

梅田俊作・佳子



うちのおかあさんは ごはんのとき、

「三十回^{かい} かみなさいよ。」

と いう。

三十回^{かい}も ようく かねで 食^たべると、おなかに

はいつたものが ぜんぶ えいようになるんだって。

えいようは、にくや ちや しぼうなんかになつて、

体^{からだ}に たくわえられる。

なにかを ふかく 考^{かんが}える。ひとつのことを さい

ごまで やりとおす。ちよつと つらいことが あつ

ても がまんでできる。あつき さむさに へこたれな
い……。

「そういう エネルギ―は、みーんな えいようが
もとなのよ。」

おかあさんは、ぼくが やせつぽちだから しんぱ
いなんだ。そのエネルギ―を 出^だしてくれる えいよ
うが、ぼくには たつぷりとは たくわえられてない
んだって。

だけど、ぼくが やせつぽちなのは、ほんとは い



ちやうとつらいことが
あつてえがまんできる
あつたやむさど
へこたれたい……

でんだと 思う^{おも}。おとうさんの やせつぽちが うつ
ったんだ。もつとも、おとうさん、このごろ おなか
のあたりだけ 太^{ふと}ってきたけど。

おかあさんだつて おとうさんの 子^こどものころの
しやしんを 見^みると、

「まあ、なおに そつくり。」

つて いうし、

「同^{おな}じ かつこうして テレビ 見^みてるわ。やっぱり

親^{おやこ}子ねえ。」

とか、

「ごはんに みそしるを かけるのが 大^{だい}すきなんて、

なおは おとうさんに にたんだわ。」

なんて よく いうじゃないか。

ぼくが そんなことを 考^{かんが}えていると、

「ほうら、十二回^{かいめ}目で のみこんだ。」

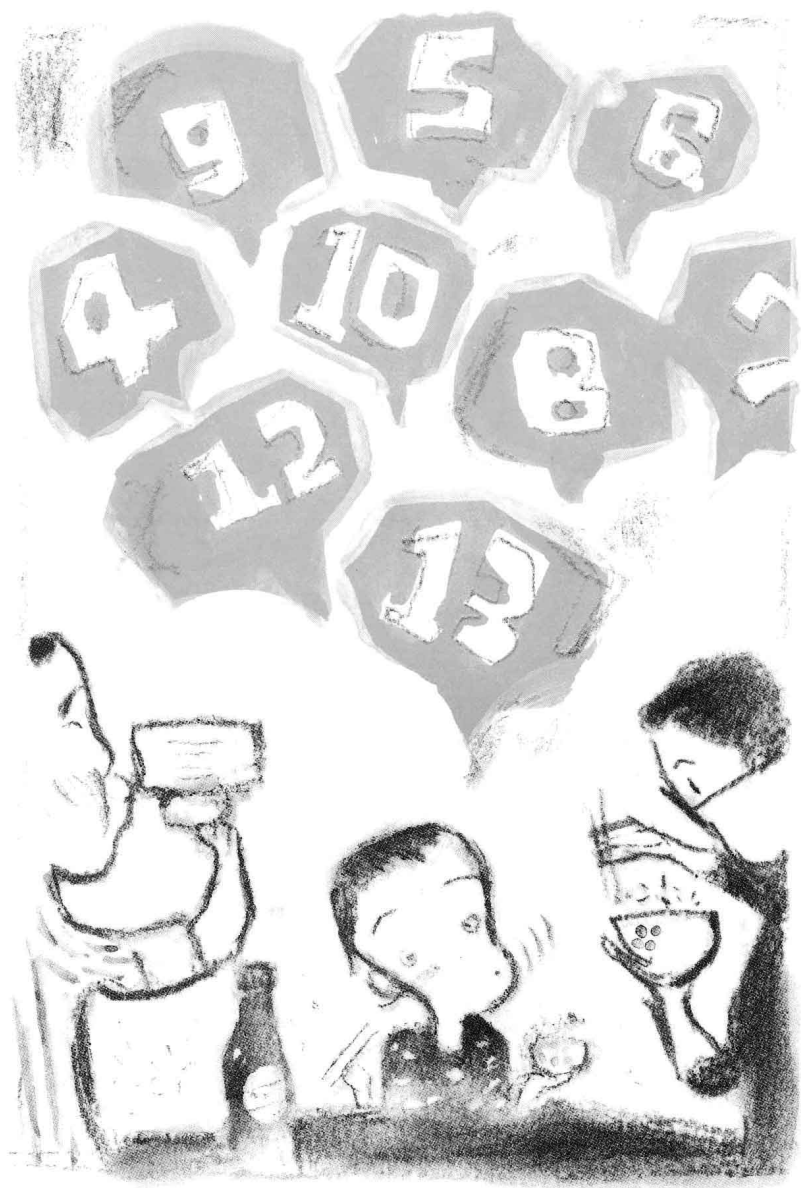
と、とつぜん おかあさんの声^{こえ}が した。いつも こ
うなんだ。そうして、

「三十回^{かい}、ようく かんて 食^たべるとね……。」「

とはじまる。だから、ぼくは、ごはんを食^たべるときは、いつのまにか「いち、に、さん、し……。」と頭^{あたま}のなかでかぞえるくせがついてしまった。いまでは「さんじゅう！」と頭^{あたま}のなかでいわないと、のみこめない。

おかげで、なにを かぞえていても、三十のところでごくと のどが なるから、こまってしまう。

うちでは おとうさんも おかあさんも おしゃべりしながら ゆっくり 食^たべるから いいけれど、学^がっ



校こうの きゅう食しょくでは どう
ぜん びりつけつだ。かぞ
えながら 食たべる人ひとなんて
ほかに いないもの。

でも、くせって かんた
んには なおらない。だか
ら、ぼくは いつも 昼休ひるやす
みの 教室きょうしつに ひとり と
りのこされて、きゅう食しょくを



食^たべていた。

それが、三年生^{ねんせい}になつて、新^{あた}しくみどり先生^{せんせい}になると、ぼくはとりのこされずにすむようになった。先生^{せんせい}が、

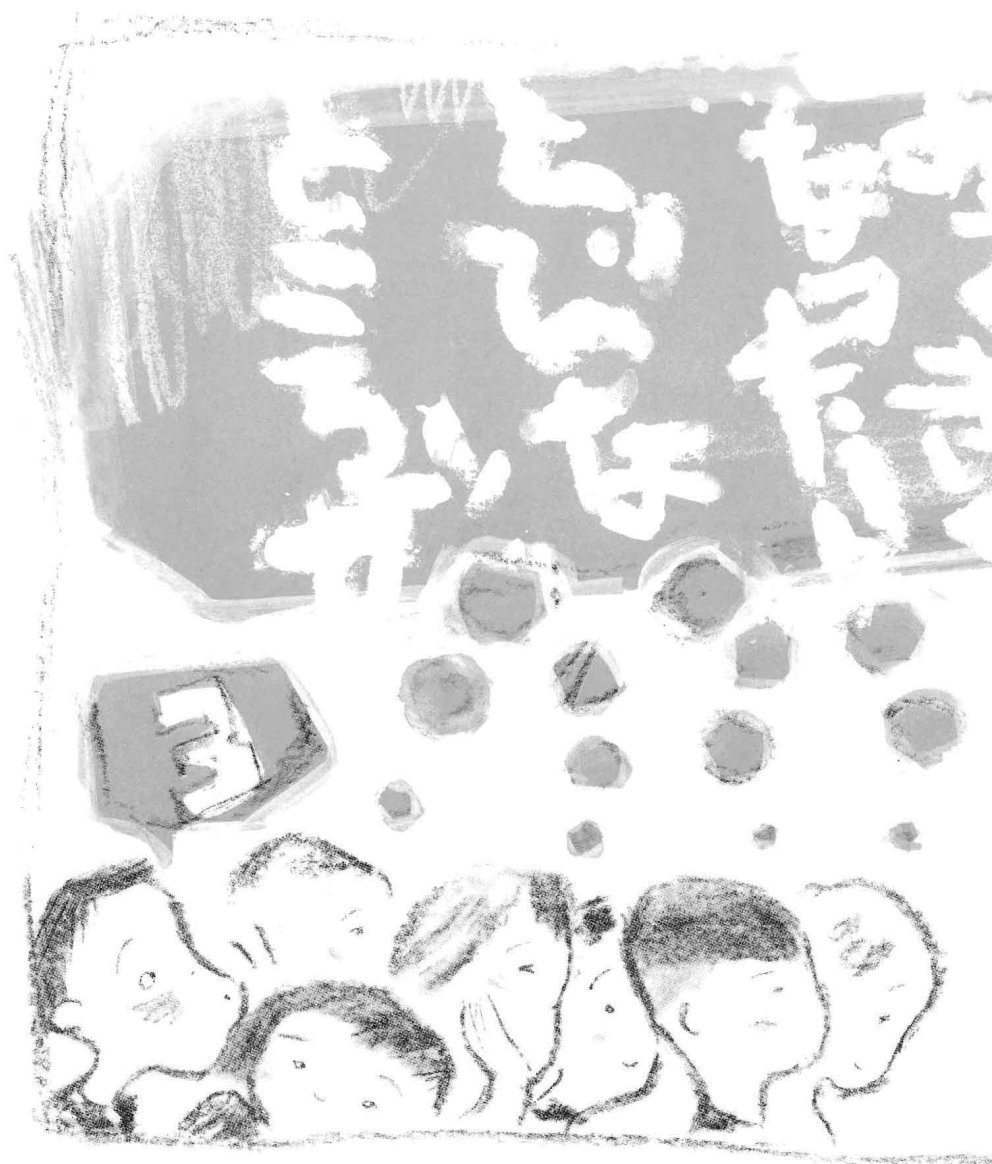
「よくかんで、のこさず食^たべるのが、きゆう食^{しょく}の



チャンピオン。」

と いて、ぜんいんが 食^たべおわるまで 本^{ほん}を よ
んでくれるんだ。ぼくは いっぺんに みどり^{せんせい}先生が
すきになった。





「さあ、本ほんをよみますよ。」

先生せんせいが、黒板こくばんのまえのいすにすわると、みんな

は おしやべりをやめた。

ぼくは 半分はんぶん 食べたおわったところ。きょうも ぼ

くが びりつけつだろうな。

本ほんを よんでもらうのが すきなのは、ぼくだけじ

やないみたい。まえは ごちそうさまを いいながら

教室きょうしつを とびだしていった りょうでさえも、このこ

ろは じつとしている。じゅぎょうちゅう よく お

しゃべりをする人^{ひと}たちも、このときだけはちがう人^{ひと}みたいにしずかだ。ほおづえをついたり、いすに
よりかかったり、みんなすきなかつこうでくつろ
いでいる。

ぼくのとりのみずきちゃんは、きょうもつく
えにうつぶせになって、目^めをつむった。

「おはなしを聞^ききながらね、自分^{じぶん}ですきなように
くうそうするの。頭^{あたま}のなかが、テレビみたいになるの
よ。」